

パキスタンカラコルム Lachet Valley Hasho PeakⅡ East Pillar 初登 ～情報の無い山域において登攀対象を探るプロセスを考える～

鳴 海 玄 希 (ジャパン・アルパイン・ガイド組合)

山 本 大 貴 (関西学院大学山岳会)

鈴 木 雄 大 (THE NORTH FACE ATHLETE、稲門山岳会)

1. 行動概要 (Hasho PeakⅡ 全景と東ピラー登攀ライン)



2. 行動記録

1) 遠征決定からベースキャンプまで

そもそも3人での遠征の話しがでたのは出発の半年前。鈴木と山本はほぼ初顔合わせであった。各自が情報を持ち寄り、興味関心と3人の力量を照らし

合わせながら、対象エリアや山を絞り込んでいく。そんな作業を4か月ほど続け、にわか遠征隊は形になっていった。

3. 海外登山記録

～山本による回想（以降名前のみ）～

鳴海と組むのは、2016年ネパールのカンナチュゴ、2018年インドのセロキシフトワール以来、7年ぶりとなる。お酒に対する揺るぎない姿勢は変わらないが、鈴木や僕の意見の食い違いにも穏やかに耳を傾けるようになり、以前より柔らかさが増したように感じた。

鈴木とは、コロナ禍のWCMで会って以来の再会で、遠征参加は今回が初めてだ。物腰の柔らかい好青年という第一印象に反し、要所では譲らない芯がある。

～鳴海～

いつもは同世代か少し上のパートナーと行く事が

多いヒマラヤ遠征。周りにも歳の近いアルパインクライマーが多く、必然的にパートナーもいつも登っているメンバーになるのだが、今回ついに、ひと回りも違う鈴木雄大と行く事になった。普段は一緒に登ったり滑ったりしているし、オジサン側としては価値観なんかもそんなに変わらず、体力的にもまだまだ!という感じではある。とはいえ向こうは行く先々でことごとく成果を残すイケイケクライマーだ。どんな刺激をもらえるのか、行く前から楽しみではあった。

もう1人のパートナーは山本大貴。僕より4つ年下だ。雄大との歳の差と比べるとほとんど同世代とって差し支えないし、彼とは過去に2回の遠征を



概念図©Himalaya#513より転載

共にしているからか、ジェネレーションギャップ的なものは（少なくともコチラは）ほとんど感じない。

よく考えたら、自分より年下のパートナーと海外遠征を共にしたのも彼が最初であった。この時は山本自身、テクニカルなヒマラヤの壁は初めてだったし、僕は僕でそれまではヒマラヤ経験者との遠征ばかりだったので余裕は無く、一見何にも考えてなさそうな山本に、時折イラついてしまうこともあった（もちろんそれは、彼の何物にも動じず、細かい事を気にしない、極めて僻地、高所向けの性分の現れでもあった）。

行き先の候補には、もっと標高が高い山、もっとアプローチが面倒なエリアの山もあったが、3人の、いや、主に山本と僕の「仕事や家族」との折り合いをつける必要があった。雄大に「この山いけますね。行くなら2ヶ月ですね」と言われても、オジサンチームは家庭や仕事の事情があった。ジェネレーションギャップ、とは違うかもしれないが、「山を決める自由度が若干落ちる」と言うのは事実である。

具体的な登攀対象としては、鈴木と鳴海が標高6,000~6,500mのミックス壁が含まれる未踏ルート、山本はより垂直に近いビッグウォールを素手でフリークライミングしながら山頂まで突き上げる山を候補として挙げていた。そのような対象がラチットバレーに眠っていそうだった。

今回訪れたラチットバレーは、パキスタン北東部の登山基地となる都市、スカルドから東に約160kmジープで移動し、さらにラチット村から徒歩で2日程の行程となる。インド国境にも程近く、そのため近年まで軍事活動以外の入域許可が出ることは稀で、登山隊が訪れることはなかった。過去にこの山域を訪れたのは2015年と2018年。ポーランド隊とアメリカ・ベルギー隊によるもの以外、記録は見当たらない。今回我々も2つのエージェントに相見積もりを

取ったが、一つのエージェントは許可が取れるかどうか分からない、取れたとしてもリエゾンが必要かもしれない（つまり予算は跳ね上がる）と言うものであった。結果的に我々が使った大手エージェントは政治力もあり、歴史も古いためか、なんとなく「適当に」やってくれた感があった。

一応の登攀候補は絞りつつも、現実的には行っただけから対象を模索するスタイルとなった。その中で、ミックスクライミング的な対象が見つかる可能性も考えられたので、BCへは、ポーターレッジからダブルアックス、モノポイントクランポンまで、どんなジャンルのクライミングに直面しても選択肢を残しておけるように全て持ち込んだ。

左右に聳える無数の岩壁を見上げながらの荒い運転を終え、ラチット村から情報の少ない溪谷へと入っていく。ポーターとの一悶着を繰り返しながら進み、二日間のキャラバンでBC適地らしき4250メートルにたどり着いた。

2) 高所順応と登攀対象決定のプロセス

数日後、高所順応へ出発する。未知の氷河なので、登攀対象を探し出す偵察の意味も大きい3泊4日となる。

元々の有力候補であったChangi IIであったが、本来、硬く質のよい岩は遠目からでも節理やラインの可能性をある程度読み取ることができる。しかし、この壁は黒々としており、節理も乏しそうだった。大きなスラブ帯に行く手を遮られる可能性が十二分にあった。氷河横断の危険度、そして南壁の登攀可能性。どちらも無理を押し通してまで当初の目的Changi II南壁に固執する理由はなかった。結論はすぐに出て、ここまでの道中で目にしていた、別の候補へ偵察に向かうことにした。

その候補とは、さらに数キロ以上先に聳えるHasho

3. 海外登山記録

Peak II と、行きのキャラバンで割と近くに（といっても双眼鏡を使って、まあまあ見える程度）見えた通称「オーガ」という、2015年のポーランド隊が入山・トライした6,100mクラスの未踏峰であった。

まずはHasho Peak II 方面へ偵察に行くが、近づくほどに岩の色、クラックの走り方、雪の付着具合……山頂へはダイレクトに伸びているものの、快適なクライミングとは程遠く思えた。

しかし東ピラーだけは、安全面や登攀内容を考慮しても、納得できるラインであった。下部はヨセミテライクな花崗岩を従え、上部は比較的簡単そうな雪のセクションが確認できる。

5,200mの順応キャンプから見た感じ、落下物や雪崩などのハザードは、周辺の壁に比べると低そうだ。

～鳴海～

僕の印象は「壁は良さそうだしクライミングは面白そうだ、ただスケールが少し小さいかな。他の候補も見てもいいかな」という感じだ。山本は結構気に入っていきそうな感じ。雄大の食指はオーガにいてるな、という感じだ。

いずれにしろイマイチ決定打に欠ける候補群だったため、一度全ての荷物を持ってベースへと撤収することにした。

～鈴木～

行きによく見えていたオーガのこれ以上ないほどに鋭利な山容と、凹角にクラックが都合よく走っているような雰囲気はやはり魅力的に感じられた。オーガを登ることになれば、北面にも位置しているため、よりアックスやクランポンを使ったミックス的な対象となり、8割以上が素手で登れそうなHasho Peak II よりは、気合いも日数も必要である。でもこのまま放ってはおけない山だ。そんな気にさせられるような壁であった。たとえ遠方から推察して可能性が低かったとしても、麓まで行けば「これはいけ

る」と変わることもある。

2人は、私よりはオーガの登攀可能性を低く見積もっていたようで、なかなか偵察の実行には即決という感じではなかった。というのも、特に玄希さんは私より12歳上で、ヒマラヤや山全般の経験値も高く、未踏壁を見ただけで登れるかどうか判断してきた経験も豊富である。わざわざ膨大な労力を使ってまで、0～40%程度の登攀可能性を探りに行くのは腰が重そうであった。加えて山本さんは、去年までネパールで氷雪壁系に通っていたので、どちらかというと今年はこの大岩壁が無数にあるエリアでアルパインロックをやりたい気持ちもわかった。しかし、オーガがこのエリア一帯で最も魅力的なもの事実であり、最終的にトライしないことになったとしても、とりあえずは可能性を探りに行こうと賛成してくれた。

～鳴海～

エリアに入って最初に目につくのはオーガである。エリア最高峰であり、鋭利で弱点の無い山容が目を引き。ポーランド隊は顕著なクーロアールを稜線まで登っているが、どう見てもそこから先が大変そうであった。

クーロアールの右手、北東面にもしも節理があれ



ベースキャンプ。奥にはポーランド隊がトライした魅力的な未踏峰も見える

ば登れるかもしれないが、色は全体的にどす黒かった。過去の経験から、基本的に僻地の花崗岩の岩質は所謂「ゴールデングラナイト」、黄金色に輝く少し茶色味がかかったものが良いことが多く、逆に黒っぽいものは脆く、節理が少ないものが多いと信じていた。オーガの北東面は明らかに後者であり、斜面方位、標高帯からも岩質は低いと見ていた。また傾斜も強い。一方でポーランド隊が登ったクーロアールは東面にあり、登るには日射によるハザードが高そうだし気温が高すぎと思った。「カッコいいけどこりゃ無理だなあ」と言うのが僕の印象であった。しかし雄大はやる気満々であった。「もうあれに決定、ベース下げちゃいましょう」と言う。山本は口をパクパクさせながらにも言わない。「とりあえず見に行ってから決めよう」と僕。

確かに可能性は低いと思った。しかし、経験あるが故に「これは無理」と決めつけてしまうのは可能性の抹殺にもなりうる、と言うのは過去の経験から知っている。

「これは厳しいな」

オーガの基部に立った瞬間、思わずそんな言葉が漏れた。岩が脆く、かつ遠目に見て想像していたのとは比べクランクが非常に少なかった。3日前の降雪が緩傾斜帯に薄く乗り、ただでさえ渋いラインに、さらに重い影を落としている。日中の気温で溶けた雪は岩棚を伝い、細い氷柱となって垂れ下がり、壁がどれほど湿っているかを雄弁に物語っていた。

～山本～

尺取虫のようにじわじわと高度を稼ぐことは、技術的にはできるのかもしれない。だが、今年はそういう登りを求めている。昨年、陽の当たらない北面でひたすら耐え続けるように登った反動が、まだ身体に残っていた。できることなら、もっと乾き切った岩を、気持ちよく繋いでいきたいかった。

本命はHasho Peak II。壁のスケール、状態、内容。そこに三人それぞれの嗜好や、チームとしての総合力をあわせて考えると、もっとも妥当なのはあの壁だと、内心では考えていた。

ただ、雄大の思いもある。候補のひとつであるこの壁を自分の目で確かめるために、丸々二日歩いた。遠回りではあったが、納得するためには必要な行程だった。気持ちは驚くほど軽かった。後ろ髪を引かれていた可能性を、一つ減らせたこと。

そして、登るべき山が、ようやく“ひとつ”に絞れたこと。迷いが減った分、足取りは軽く前へと押し出してくれた。

～鳴海～

この偵察行を無駄だとは全く思っていない。むしろ、3人、特にこの壁への想いの強かった雄大含め、全員が心から納得したし、それこそがチームにとって重要であったように思う。今考えると、この偵察行のおかげで世代も経験も異なる3人がまとまったような気もする。

～鈴木～

この課題は死を覚悟で登る未来のボールドなアルパインクライマーに委ねよう。でも選択肢を潰すことも、開拓が一步進んだことを意味する。ここまで来たことは無意味ではない。何より最も魅力ある山



ルート1ピッチ目のルーフクラックと格闘する鈴木雄大

3. 海外登山記録

に一切未練を残すことなく、Hasho PeakⅡに向かえる態勢を全員でつくれたことは成果であった。

いくつかの目ぼしいピークへの偵察を繰り返しながらの順応も5,400メートルまで完了し、未踏の氷河も探索できたので、一応の成果はあった。かなり遠回りをしたが、私達の狙いはHasho PeakⅡに定まった。

「課題探し」。これが未踏のクライミングをする上で一番難しい。それはGoogle EarthやAlpine Journalの写真をチェックするだけで運良く完結する事もあれば、今回のように原始的に歩き回らないといけないことも多い。

数日の雨をベースキャンプでやり過ごし、順化で使った道を再び歩き直してABCへ。やっとのことで本気トライへ漕ぎ着けた。

3) 登攀

スパッと切れ込んだ美しいクラックの見た目とは裏腹に、その手は汚い砂で覆われ、5000メートルを越える高所も相まって直ぐにパンプしてしまいそうになる。エイドも交えながら、剥がれそうな泥つきクラックを優しく押さえつけたり、踏んだりしながら、順調に高度を稼ぐ。



3ピッチ目、クラックの泥を掻き出し前進する

～鳴海～

15時頃、ビレイ点を出る山本に「ビバーク地良いのがあったらそこに泊まろう」と僕が声をかける。若い頃は暗くなっても進み続けることがあったが、今は休養の大切さを知っている。それに細い節理にプロテクションが取れるかどうか肝のロッククライミングで、暗闇の登攀は無駄が多すぎる。日没2時間前にはビバーク地の事を考えないと、いい所を見つけれられるチャンスは限られるだろう。

「いいのありましたよ! 多分座れる!!」嬉しそうに山本が叫んだ。そうか良かったとフォローして行くと、そこはとんでも無く狭い岩の隙間でとてつもなく窮屈そうだ。彼のビバーク地のハードルはとてつもなく低いらしい。



岩風呂のような初日のビバーク地

幅60cm × 200cm の“バスタブ状”の窪地に2人。そしてもう1人は、幅40cm・傾斜した“棚”と呼ぶには心もとないスペースで何とか横になれそうだった。ビバーク採点なら30点。しかし贅沢は言えない。暗闇が訪れる前にもう1ピッチ登って上部を確認したが、先ほどの30点サイトこそ今夜の正解だった。岩に挟まれながら、朝起きるとあちこちが痛い、何となく少し回復した感じもする。5,500メートルだった。

二日目は少し傾斜も落ちる。詰まないように慎重なルートファインディングをしながらも、前日より

もペースは上がり、少し同時登攀をしたのち、やがて垂直のミックスタイプのセクションへ。この辺りは岩質もかなり良くなってきて、シャモニーのようなクライミングを楽しめた。パキスタンの辺境で、5,500メートル地点に聳える上質な花崗岩をスピーディーに越えていく。5.7～9 程度のムーブではあるが、プロテクションを探したり、いいテラスでピッチを切ったり、頭をフル回転させながら登っていく素晴らしいピッチの連続だ。



シャモニーのような三ツ星ピッチを登る鳴海玄希

5 ピッチほど登り、一筋の雪のルンゼに合流する。3 時を回り、全行程を通して最も平らな雪面に乗り上げた。山頂を見上げると、パキスタンで毎回苦勞させられるテカテカの氷壁が待ち構えている。今から登りだすと確実に暗闇の中での行動となるので、まだ陽はあったが、焦らずにビバークする。登ってきたのはずっと岩だったが、流石にカラコルムの 6,000m 付近でのビバークは体が芯から冷え切り、深夜 2 時を過ぎた辺りからは、足先をずっと動かししていないと耐えられない程だった。

登攀 3 日目、今日も快晴。当初の戦略通り、一番硬い靴とクランポン、そして 2 本のアックスを持っている山本がここから山頂まで全てリードで、鳴海と鈴木は軽量化したスカルパのリベレテック 3.0 という柔らかい靴で強引にフォローをする。クランポンも柔らかく、アックスもアルミ製の片手しか持っ

てきていないので、到底リードはできない。ただ、氷質がしっかりとしたブルーアイスだったので、上からスクリー 2 本で確保されていれば安心して登ることができた。

4、5 ピッチ程度ひたすら同じ動きを繰り返し、脹脛が痛くなってきたところで、前方の視界も開けた。これ以上ない快晴無風の素晴らしいコンディションで、Hasho Peak II の山頂に立つことができた。あまりにも眺めが良いので、30 分ほどゆっくりした後、下降に取り掛かる。テントをデポした地点までは、氷もよく、懸垂下降でスムーズに降りられたが、そこからの大変だった。



山頂にて 左より 鈴木、山本、鳴海

ある程度は予想していたものの、下降に使う氷河のクレバスが凄まじい。中には数日前の降雪などによって隠れているものも多く、先頭を務めた鳴海は、膝くらいまで何回か落ちながらも下降路を開拓していく。こういった時の安心感はやはり 1 人よりも 2 人、2 人より 3 人で良かったとチームの有り難みを心底感じる、かなりリスクな氷河の下降となった。時間をかけながらも慎重に ABC まで歩き切り、久しぶりに腹一杯飯を食べられる喜びに浸り、好きなだけ水を飲んだ。

～鈴木～

登り終えて壁を見上げると、苦勞して辿ってきた軌跡が手に取るように分かり、その分壁が大きく見

3. 海外登山記録

えた気がした。パキスタンの人跡未踏の氷河で、登る山を手探りで見つけ出し、標高差900メートル近い未踏の壁を登る。標高差やグレードで言えば、たいしたことないような気もするが、やはりそこには登った者にしか分からない不安や楽しさ、冒険的要素が詰まっており、人生でも指折りの、素晴らしく充実したクライミングであった。

～山本～

今回の遠征は、特別な成果を残したわけではない。ただ、自分たちの足で歩き回り、まだ見ぬ山を探し、登れるかどうか、そこに楽しさがあるかどうかを見極めていく――その過程を存分に味わうことができた。

もちろん、氷と岩の世界では日々のクライミングに神経を尖らせ、外的要因におびえるようなストレスフルな登山、その先に訪れる充足感が圧倒的であることは知っている。今回の遠征で満たされたのは、そうした緊張の果ての達成感とは少し違う種類のものだった。

最後の最後に自分たちが納得した壁を山頂まで登りきれたことは確かに楽しかった。けれどそれ以上に、ベースキャンプの脇にある小さな岩で、気ままにボルダーを楽しむような、自由でのびやかな時間こそが心に残っている。もっと良い山があるかもしれない、この先にさらに面白そうな岩があるかもしれない。そう思いながら歩き回り、探し続けること自体が、今回の遠征を豊かにしてくれた気がする。

